# 異言語間翻訳を超越する
## ――科学技術社会論の視点から見る文化財多言語化

吳 修喆 • 奈良文化財研究所

# Beyond Interlingual Translation: Rethinking Foreign-Language Texts on Japanese Cultural Heritage Through Science and Technology Studies

Wu Xiuzhe • Nara National Research Institute for Cultural Properties

翻訳／Translation　科学技術社会論／Science and technology studies
アクターネットワーク理論／Actor-network theory
サイエンスコミュニケーション／Science communication

## 1. はじめに

「とまり、きき、みて、とおれ」

職場近くの踏切に標示されているこの言葉がなぜか好きで、おそらくこの一行に何らかの詩情を感じたのだろう。試しに中国語に訳してみると、「停、听、看、过」となる。なるほど、悪くはない。悪くはないが、やはりどこか違う。中国語の動詞が単音節であるために原文のリズム感を再現できていないからか。もしそうでしたら、「停一停、听一听、看一看、再请过」のほうがリズム的に近いかもしれない。

現職に就くまでの２年半の間、筆者は個人研究を中断し、大学の中国語非常勤講師とフリーランス翻訳の二足の草鞋を履いて生計を立てていた。訳文を吟味するのはもはや一種の職業病である。奈良文化財研究所の多言語化アソシエイト・フェロー（AF）として着任してから、正確に言えば、このポストに応募した時から、〈多言語化〉と〈翻訳〉の違いについて日頃から考えるようになった。

奈文研の多言語化チーム（3名のAFが在任）は、奈良文化財研究所の多言語化

を加速させるために発足し、特別史跡平城宮跡および奈良時代の都城遺跡を訪れた外国人来訪客に向け、日本古代の歴史・文化への理解を深め、より効果的な展示解説・情報公開を目的とした事業を担当している。〈多言語化〉と聞くと、多くの人は「異言語間翻訳」を連想するだろう。実際には、専門的情報と一般向け情報の間における「同一言語内翻訳」も行われる。それは、言語の異同に関わらず、専門知識を非専門家にうまく伝えることによって、科学研究への関心や支援を取り付けるなどの結果が期待されるためである。また、既存の日本語解説は日本人読者を想定して書かれたものが多く、想定読者には外国人旅行者や翻訳者が含まれていない。そのため、翻訳者にわかりやすくなるよう工夫しなければならない（Yanase2021：9-10 頁）。しかし、以上の点に注意を払って事前に工夫さえすれば、外注の翻訳で事足りるのではないか、いわゆる「多言語化担当者」は必要ないではないかと思われるかもしれない。このような誤解を招かないよう、本稿では、筆者が2020年9月から手がけてきた文化財多言語化業務を事例として取り上げ、多言語化の多種多様な実態を示すとともに、コミュニケーション機能としての〈翻訳〉を全体的にコントロールし、科学技術社会論的〈トランスレーション〉[1] をも担う多言語化担当者の役割について考察したい。本稿の主な目的は以下である。

- 観光振興目的のツーリズム的多言語化から脱皮し、次なるフェーズを見定める
- 文化財多言語化事業を科学技術社会論的〈トランスレーション〉概念として認識することで、文化財研究のイノベーションを促す刺戟的かつ不可欠な要素として構造的に組み入れる重要性を説く

## 2.〈トランスレーター〉としての多言語化担当者

### 2.1 アクターネットワークにおける〈トランスレーション〉

事例分析を行う前に、まず本稿で導入する〈トランスレーション〉概念について簡単に紹介したい。科学技術社会論（Science and technology studies＝STS）とは、科学技術をめぐる歴史・理論・政策・コミュニケーションなど幅広いテーマを対象とした学際的な研究の総称である（淺野・田中・若杉2017: 264頁）。そのなかで、1980年代にフランスのB. ラトゥール、M. カロンおよびイギリスのJ.

[1] 両方とも英語ではtranslationだが、異なる概念であるため、区別しやすいように本稿では後者をカタカナ表記にする。

ローの３人を中心に提起された「アクターネットワーク理論（Actor-network theory＝ANT）」というアプローチが影響を及ぼしている。ANTは、人間・非人間を問わず、事物や状況の構成要素の最小単位を「アクター」として捉え、そのアクター同士が接近・反発などしながらネットワークを構成するさまを捉えようとする方法論である。各アクターが当該ネットワークの要件にもとづいて適材・適所・適時に用意されることが「トランスレーション」と称される。そして、知識や技術が正確・有効なものとして確立され普及していく過程における専門家以外の人々や社会的要因の積極的な働きを認め、知識や技術も人々の関心や目的に応じて変形され増殖していくプロセスを描くのが、ラトゥールが提案した「トランスレーション・モデル」である（平川2005：260頁）。

一言でいえば、〈トランスレーション〉とは、アクターたちが置かれている場面がどのようなものかをはっきりさせ、そのなかにおけるそれぞれの役割を明確にすることによって、他のアクターに働きかけたり、自ら行為したりすることを可能にするものであり、アクター同士の結び付き・協働の枠を作るプロセスである（大橋・竹林2015：17頁）。このプロセスにおいて、それぞれのアクターのアイデンティティーを把握し、アクター同士の間における相互作用の可能性を探り、必要な方策や実施方法を決めるのが「トランスレーター」の役割となる。要するに、トランスレーターはネットワークの構成要素である多くのアクターと関連するものが望ましい。一般的な状況で考えると、情報やデータがより集まりやすいアクターをトランスレーターに選んだほうが効率的である（唐磊2015：42頁）。

奈文研では、多言語化担当者が中心となり、専門家・非専門家・文化財・展示施設・印刷業者・文化財情報・情報端末などのアクターを協働的ネットワークに動員し、トランスレーターとしての役割を発揮している。その実行過程を、次に挙げる「多言語化木簡リーフレット」の事例で説明したい。

### 2.2 多言語化木簡リーフレットのプロデュース

トランスレーションの各段階において、最初に行われるのは「問題化（problematization）」[2] というものである。それは、あるアクターを別のアクターに対し、後者が解決したい問題の定義と解決の仕方として、前者が提案するものを受け入れるように働きかけ、後者を前者のネットワークに動員することを

[2] トランスレーション・モデルは問題化（problematization）、関心付け（interessement）、組み入れ（enrolment）、動員（mobilization）の四つのモメントからなるプロセスである（M. Callon 1986: p. 201）。

表している（出口2009：87頁）。木簡リーフレットの事例における「前者」とは、すなわちトランスレーターの役割を担う多言語化担当者である。では、他のアクターが解決したい問題とはどんなものか、簡単にまとめると以下のようになる。

- 専門家（研究員）：研究成果にもとづき、日本の歴史文化を広く国民や訪日外国人に伝え、理解を促す責務をどう果たすか
- 非専門家（非日本語話者の来訪客）：日本古代特有の文字表現や制度などの理解を必要とする、比較的「ハードルの高い」文化財である木簡を理解したい
- 展示施設（平城宮跡資料館）：多言語による平易な解説を拡充していくとともに、来訪客が「手に取りたくなる」「読んでみたくなる」「共感してしまう」「持ち帰りたくなる」ようなリーフレットを製作・配布したい

ここで忘れてはいけないのは、多言語化担当者がこのネットワークにおいて、〈翻訳〉も行わなければならないことである。翻訳者としてまず解決したい問題は原文を入手することである。困ったことに、原文は最初から用意されているわけではない。なぜなら、一言で「ハードルが高い」と表現したが、各言語文化圏の人々にとって、木簡を理解する「ハードル」の具体的な様相は異なる。日本と同じく漢字文化圏に位置する国でも、現代まで漢字を使用している中国とほとんど漢字が使われなくなった韓国とでは、採用すべき説明手法が違ってくる。理解を阻む様々な障壁が言語ごとに存在するため、それらの文化的背景を考慮し、それぞれの言語文化圏に親和性が高いように、言語ごとに異なる内容を一から構成したほうが、単一の原文から翻訳するより良い効果が期待できる。

本来ならば、実際の来訪客へのアンケートやヒアリングなどをとおして関心付け（interessement）のステップに移るが、コロナ禍の影響で、訪日外国人が減少しているため、新しく着任した多言語化担当者が自ら代表となり、それぞれの言語文化圏からの来訪客の関心要素を提案した。提案は展示施設が期待する効果に沿って、形と内容の二つの面から出された。まず、「手に取りたくなる」「持ち帰りたくなる」効果を目指すために、従来の小冊子型ではなく、変わったギミックで構成・印刷した楽しめるものを作る。また、「読んでみたくなる」「共感してしまう」ような内容を構成するために、デザインや原稿がすべて異なるリーフレットを作成することで、それぞれの世界観を表現することを提案した。また、形状と内容をマッチさせ、相乗効果を発揮させるというコンセプトを設定した。

上記のコンセプトを実現するためには、印刷業者というアクターをネットワークに組み入れる（enroll）必要がある。そこで、多言語化担当者が印刷業者を招

き入れ、両者による打ち合わせを行った。多言語化担当者は、自ら提案した形での印刷が可能かどうかを打診し、印刷業者は既製品のサンプルを持参した上で、それ以外の形も提案した。この段階で、英語版は「フラッパー」という特殊変形印刷を採用し、四コマ漫画風に木簡調査の流れを解説するという形式に決まった。韓国語版は奈良時代における貴族邸のコース料理をイメージに、中国語版は木簡を使ったクイズにする、という素案ができあがっていたため、内容とのマッチ度を吟味しながらそれぞれの印刷物の形が決定されていった。後日、印刷業者から印字されていない白いダミー製品が提供され、それにもとづいて、各言語版リーフレットの内容に関する詳しい打ち合わせが多言語化担当者と木簡担当研究員の間で数度にわたって行われた。以下の流れは中国語版のプロデュースを中心に説明する。

前記のように、各言語文化圏において木簡を理解するハードルは異なる。漢字の国である中国では、紙が普及する前の長い間、「簡牘」による書写文化が発達していた。それゆえ、中国人にとって、記される内容はともかく、「簡」そのものは馴染みのある出土文字資料である。ただ、日本では木簡が紙と併用されていたことや、木簡の定義・分類・使用場面など詳しい情報については、一般向けに基礎知識を普及する必要がある。さらに、日本の木簡は漢字が書かれているが、そのすべてが中国から伝来したままの漢文というわけではない。中には漢字仮名表記による和文なども相当数あるため、それ相応のリテラシーを持たないと解読することが困難である。その難しさを面白さへ転化し、目標言語である現代中国語とリンクできるように、多言語化担当者である筆者は、リーフレットの内容をクイズ形式にすることを提案した。謎めいたイメージとマッチさせるために、一枚一枚開きながら読む「蜂の巣カット」仕様にしたデザイン案を出した。リーフレットのデザインに QR コードを入れることで、奈文研による「木簡庫」データベースもアクターとして組み入れられるようになった。

「役者（アクター）」がほぼ揃ったところで、残りのステップは、ネットワークとして協働体をフル稼働させるための動員（mobilization）である。まず、原稿を構成するために「クイズ」というテーマに沿った材料を収集する必要がある。そこで、中国人である筆者から答えとなる中国の熟語をいくつか候補に挙げ、研究員はその豊富な木簡知識にもとづき、熟語から連想できそうな文字や墨画がかかれている木簡を木簡庫からピックアップし、題として提供してくれた。最終的に、熟語連想クイズ３問および木簡の概念に関するクイズ１問が作られ、各問の答えの下に付く一言解説とコメントは、研究員から口頭で原案をもらい、筆者が中国語原稿を

書き上げた。さらに、その原稿はすぐに使用するのではなく、木簡を専門とする別の AF によって日本語に訳されたものを担当研究員と読み合わせ、見解の齟齬が生じていないかを確認した。ここまでの作業を経たのち、筆者が原稿文字を配置したレイアウト案を印刷業者に送付し、本デザインと製版を依頼した。

中国語版木簡リーフレットに入れた QR コードは二つある。一つは「木簡庫」データベースへのリンク、もう一つは中国語版解説シートのアドレスである。解説シートにはリーフレットに載せている各木簡の詳細情報が記されている。読者はリンク先の奈文研リポジトリから PDF ファイルをダウンロード・閲覧することができる。「木簡庫」への案内と同じように、リーフレットで日本の木簡に興味を持った読者を「専門的領域」へといざなう。これは、奈文研が長年蓄積してきた文化財情報と読者の手元にある情報端末も、このネットワークのアクターであることを意味する。ちなみに、解説シートには研究員による日本語原稿が存在する。ここではじめて、〈翻訳者〉としての筆者が「通常」の異言語間翻訳業務を行った。翻訳が終わると、簡体字版・繁体字版をそれぞれ担当する 2 名のネイティブ校閲者の校閲を経て、研究員の最終チェックが行われ、ようやく最終段階である紙媒体での印刷・配布、そして電子版のリリースが可能となった。

以上、木簡リーフレットのプロデュース過程をとおして、多言語化担当者による〈トランスレーション〉の流れを紹介した。この事例において、異言語間翻訳が作業全体に占める割合が小さく、トランスレーターが戦略的に他のアクターと協働関係を構築する行動がメインとなる。今後の文化財多言語化事業にとって、この関係構築にかかった準備・適応するプロセスがきわめて参考になる。

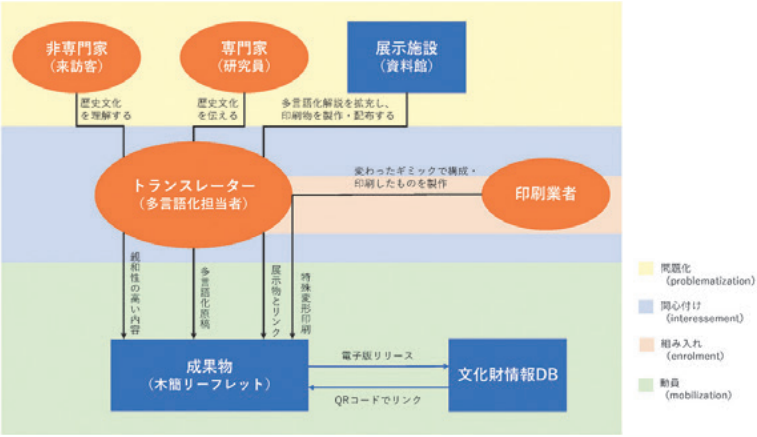


図1　木簡リーフレットのプロデュースにおける4つのモメント

### 2.3 専門家による一次情報を「プロトタイプ原文」とする

上記の木簡リーフレットの事例では、文化財情報データベースは既成のアクターとして取り扱われており、その働きがブラックボックス化[3]されているが、ここで、奈文研収蔵品データベース（以下「収蔵品DB」）を事例に、木簡リーフレットの節で詳しく説明しなかった文化財情報・情報端末の動員および同一言語内翻訳の実態を紹介し、多言語化データの整備に関わる具体的な作業について説明したい。

平城宮跡資料館では、多言語での解説の拡充を順次進めているが、館内の展示スペースには限りがあり、複数言語での解説をすべて掲示することは難しい。そこで、より効果的な展示解説と情報発信を目的に、奈文研は収蔵品DBを公開し、さらに、タブレットやスマートフォンなどのモバイル端末で閲覧できるアプリで多言語化解説の提供を開始した。収蔵品DBでは500件ほどの多言語化データが整備され、新たに撮影した展示品全品の写真および展示品の出土状況の写真や図面を追加している。アプリでアクセスできる展示品の解説は100件ほどあり、早稲田システム開発株式会社の「ポケット学芸員」という製品を利用している。展示品近くにある番号をアプリの検索欄に入力するだけで閲覧可能となっている。また、資料館内では2020年12月にフリーWi–Fiを導入した。

木簡リーフレットと同じように、アプリで閲覧できる多言語化解説文にも、翻訳元となる日本語原文は存在しない。したがって、最初の作業は、データ入力補佐員の協力の下、展示品のリストアップとプロトタイプ原文の作成である。プロトタイプ原文とは、奈文研が公開する「全国遺跡報告総覧」「学術情報リポジトリ」で各収蔵品の発掘調査報告書など文献資料を調べ、そこから当該収蔵品に関する記述を抽出したものである。情報が整理しやすいように、データ入力補佐員にプロトタイプ原文を「これは何」「どのようなもの」「その他説明」の3項目に分けて入力するように指示した。しかし、基本情報を洗い出したとしても、中には簡略すぎる記述もあり、展示解説として不十分な文章が多く見られる。多言語化担当者はそれらを元に、情報量を適宜に調整しつつ、各言語で記述を再構成していく必要があった。例えば、「漆紙文書」のプロトタイプ原文は以下のようなものである。

[3] ブラックボックス化とは、安定化したネットワークはより大きなネットワークの変動のなかで硬い点のように振る舞い、さらに他の要素を巻き込み、それらの関係を変えていくことである（平川2002：29-30頁）。

・これは何：漆片に文字のあるもの
・どのようなもの：オモテ面 ( 漆の付着していない面 ) に 4 行の墨書が認められる。宝亀 2 年 (771) の年紀があるが、月日のない点や記載位置からすると、文書作成年そのものとは考え難い。漆付着面に 8 行の墨書が認められる。内容は左京または右京の計帳で、ある戸の冒頭の統計記載である。
・その他説明：これが漆紙文書の中でも最も早く報告されたものの一つである。

非常に正確な記述であるが、はじめて「漆紙文書」という用語を目にした読者にとって、そもそも「漆紙」とは何なのか、なぜそのような紙に文字が認められるのか、などの基礎情報が不足している。収蔵品の命名（モノの判別・確定）に関する記述は、読者の信用を得るために、サイエンスコミュニケーションにおいて重要な意味を持つ。それを補った形で作成した中国語解説は以下のような文章となった。下線部は追加した情報である。

古人将废旧纸质文书用作漆罐盖子，被漆渗透的纸可抗腐蚀，因此得以留存至今〔古代では、廃棄文書が漆の入った容器の蓋として使われていた。漆に浸潤された紙は腐食されないため、現在まで残った〕。该藏品是最早报告的漆纸文书之一。表面（未附着漆的一面）可见 4 行墨字，其中包括宝龟二年（771 年）的记述，但未涉及详细日期，并且，从文字的位置来看，很难认为这就是文书的实际写作年份。反面（与漆接触的一面）可见 8 行墨字，内容为左京或右京的征税账，有账簿开头对某户的统计。

このように、記述を「漆紙文書の定義」「当該収蔵品の位置付け」「詳細情報」と、全体から細部までという順番にした。

この事例をとおして形成された平城宮跡資料館におけるヒトとモノのネットワークは、以下の図式で表すことができる。

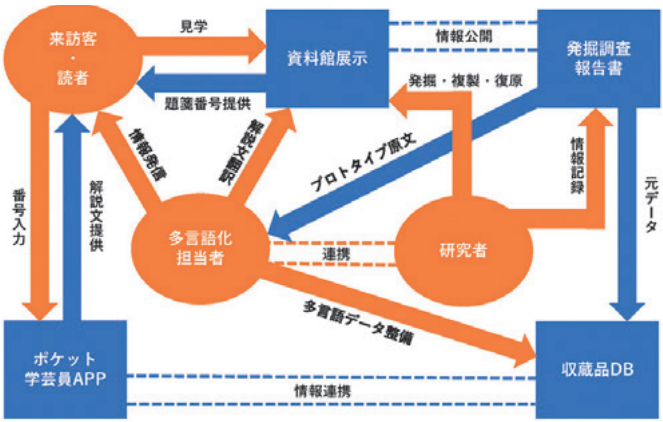


図2　平城宮跡資料館におけるヒトとモノのネットワーク

## 3. サイエンスコミュニケーションとしての多言語化

### 3.1 専門家と非専門家の間

奈文研における文化財多言語化は、簡単に言うと日本語を読むことができない、または得意としない方に研究成果を発信する仕事であり、サイエンスコミュニケーションの分野に属する。実際、奈文研は、すでに資料館・資料室の活動を中心に多くのサイエンスコミュニケーションの実践をしてきた。また、オンラインでは「なぶんけんブログ」や「なぶんけんチャンネル」などWebコンテンツを積極的に展開している。

上記のように、文化財多言語化の作業は、翻訳すべき原文が存在しない段階から他のアクターを動員し、二人三脚で成果物を作り上げるケースがある。なら、原文がすでに存在する場合はどうなるか。たしかに、既存の一般向けコンテンツを異言語に翻訳すれば、それだけでも「多言語化」と言えるかもしれない。しかし、実際に翻訳作業をしてみればわかるが、日本人向けに書いた原文は必ずしも異言語翻訳用に適しているとは限らない。そのような場合、翻訳用の日本語原文を別に作成するか、翻訳の過程において多言語化担当者が適宜に内容や文体を調整する必要がある。

サイエンスコミュニケーションと多言語化にまつわる共通した誤解の一つは、「素人／外国人向けだから、わかりやすい文章に超したことはない」ということである。なぜ「誤解」かというと、受け手は必ずしもサイエンスの素人とは限らないし、「わかりやすさ」を優先すると別物になる恐れもあるからである（渡辺

2011：16頁)。そもそも、「公衆」の科学リテラシーを正確に想定することが不可能であり、また、受け手を限定することは逆効果をもたらす場合もある。ちなみに、脳科学研究者である筆者の友人は最近「弁護士からのメールを読んで、全部自分の知っている単語が並んでいるとなんとなくいやで、逆に自分の知らない単語がいっぱい入っているとうれしい」と言った。この言葉から示唆を受けた点が二つある。一つは、専門用語には「信頼性」を担保する機能を持っているため、専門用語を排除すればするほどいいコミュニケーションが取れるというわけではない。もう一つは、たとえ科学技術の専門家でも、分野が違えば当然ながら門外漢となることである。サイエンスコミュニケーションとは、相互の科学リテラシーの溝を埋める行為、ひいてはお互いの「常識」をすり合わせる行為でもある(渡辺2011：15頁)。

人はそれぞれ認知バイアスを持っているのは自然であるが、認知バイアスをひとえに有害なものとして捉えてはいけない。専門外の人間であるからこそ、時に「内部」の人が気づかないような用語の曖昧性に気がつく。非専門家として、外国人として、何重ものバイアスを持つ多言語化担当者は当然、気をつけなければ誤訳してしまう時もある。例えば、なぶんけんチャンネルで公開中のCG動画「平城宮へのご招待〜奈良時代の政治の中心地〜」のナレーション原稿の中に、「重層の門」という表現がある。辞書を引けば「二階建ての門」とわかるが、筆者は最初、外側・内側に設置する二つの門、あるいは二層の扉を持つ門と理解した。なぜなら、中国語には「重門疊戸」という四字熟語があり、「防衛のために何重もの門を設置している状態」という意味である。また、現代中国語の「双層門」をインターネット上で検索すると、筆者がイメージした扉が二層の門が出てくる。中国人として、「重層の門」という文字を見て真っ先にそのように想像するのは、さほど不思議なことではないかと思う。こうした思わぬ落とし穴を避けるためには、できるかぎり実物または図面を見ながら翻訳するか、随時研究員に相談するのがベストである。木簡リーフレットの事例のように、完成した訳文をもう一回日本語に訳して研究員に最終確認を依頼することの意味もそこにある。気づかないうちにお互いの「常識」に惑わされて誤訳が生じてしまうかもしれないからである。

同じく国営平城宮跡歴史公園内にある平城宮いざない館との差別化をはかるために、現在、平城宮跡資料館は既存の平城宮・京の展示に加え、考古学や奈良時代に限らない奈文研の最新の研究成果を展示公開する施設として位置づけられている。このような展示施設の来訪客や宣伝物の読者は、考古学など文化財科学関

連の従事者でないにしても、別領域の専門家か技術者、あるいは、研究者ではないが該当分野を愛好するいわゆる「〇〇オタク」である可能性が十分にある。奈文研の多言語化担当者はそれぞれ日本史・日本思想・文化研究を中心とした分野で個人研究を行っているが、文化財科学関連においては非専門家である。そういう意味でも、多言語化担当者は情報の送り手と受け手の中間に位置し、サイエンスコミュニケーションを円滑に進めるための〈トランスレーター〉として適任である。

### 3.2 ジャーゴンの処理

上述のように、バランスの良いサイエンスコミュニケーションを成立させるには、専門用語を残しつつ、受け手がより正確に理解できるように説明を補うという方法が有効である。ただし、多言語化において慎重に扱うべきなのは、必ずしも特殊な専門用語とは限らない。日常語であっても、コミュニティが異なれば業界特有のジャーゴンとなりうるため、異分野コミュニケーションの壁を崩すリテラシーの共有をはかる工夫が必要となる（渡辺2011：15頁）。例えば、2021年度の奈文研新人研修において、「出土建築部材の調査法」の研修資料に「イキ・シニの判別」という項目があった。講義中はなんとなく「イキ＝使用された当時の形状が保たれている状態、シニ＝折損や腐食など損傷によって原形が失われている状態」と理解をしていたが、研修後、講師の鈴木智大主任研究員に訊ねたところ、「必ずしも一般的な言い方でないかもしれないが、考古学にしても、建築史学にしても、皆さんなんとなく理解されている」との返答を得た。また、『出土建築部材における調査方法についての研究報告』に、「当初の形状を残す部分と残さない部分については、特に名称があるわけではない。ここでは便宜上、当初の形状を残す（生きている）部分を『イキ面』とし、当初の形状が残らない（死んでいる）部分を『シニ面』と呼び表すことにする（奈文研2010：17頁）」と、定義らしき記述が見られる。このような命名の仕方も研究者の思考が反映されているため、興味深い言語現象である。外国語で説明するにはやや難しいが、豆知識として注釈付きで紹介するのもいい試みではないかと思う。ここでは一例だけ挙げたが、研究者が使い慣れていて、なんとなく「共通語」と思われているが実は小範囲内でしか通じないような用語は他にもたくさんある。この問題に関する詳しい整理と議論は別稿に譲りたい。

その他、「なぶんけんブログ」の記事には、時々研究者の遊び心がうかがえる用語が登場する。例えば、「巡訪研究室（9）都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）史

料研究室」には「ざぶとん」と「なみへい」が出てくる。「ざぶとん」とは、木簡を水の入ったバットに入れて保管する時、木簡の下に敷く清潔なタオルのことである。これは奈文研内部における通称として使われている。「なみへい」とは木簡の洗浄に使う毛を一本だけにした研究員自作の筆のことで、日本人にはお馴染みの国民的アニメ『サザエさん』の登場人物である「磯野波平」にちなんだ名称である。これらのユーモラスな呼び方は、異なる言語文化圏の人には伝わりにくいが、生き生きとした研究者像を構成する文化的要素として、なるべく訳註付きの形で残し「物語」に組み入れたい。

### 3.3 研究の進展過程を記述するということ

最後に、もう一つ忘れてはいけないのは、「事実」と「常識」は常に見直されることである。どれほど専門的な一次情報も、「事実」ではなく「人間によって事実と主張されるもの」であり、それ自体が見直されていく可能性は常にある（野原2011：24頁）。「科学の不確実性（scientific uncertainty）」[4]をサイエンスコミュニケーションで公衆に理解してもらうためには、現段階の通説だけでなく、新たな発見や知見が加わることで研究が進展していく様子をも解説中に記述すべきである。それによって、解説を更新する都度に「物語」は成長し、より豊かで多彩な筆致で科学の歴史・研究の道筋を描くことができ、内容の陳腐化を防ぐことができる。

前述したように、平城宮跡資料館は平城宮いざない館など施設との差別化をはかるために、常設展にしても、特別展にしても、最新の研究成果にもとづくストーリー構成を心がけている。ただし、官衙復原展示コーナーの大極殿・大極殿院模型は1996年当時の研究成果にもとづいており、現在の研究成果と異なる部分が見られる。資料館のウェブサイトでは、歴史公園内に実際に復原された建物と見比べることをすすめている。その他、展示品の中にも研究の進展を反映するものがある。例えば、表面に残る痕跡から本来とある「栓」と考えられていて、「轆轤残材」と名付けられた木製品は、百万塔の未完成品の可能性が高いことがわかった。日本語の原稿にこのような情報が入っている場合、中国語に翻訳する時も省略せずに丁寧に訳す。多言語化担当者としては、海外も含めた研究動向を俯瞰し、発信する情報が古くなっていないか、背景知識として説明を補足する必要がある

[4] 知識の状態としては、自然現象や社会動態の化学的分析結果に、断言のできない内容が含まれている状態を指している。そしてこれらは、科学の知的努力によって低減可能か不可能か、のいずれかの性質をもつ（宗像2005：259頁）。

かどうかを常に確認しながら作業していくのが理想的である。

## 4. おわりに

以上、筆者が2020年9月より多言語化担当AFに着任してから、およそ一年間にわたって手がけた文化財多言語化業務を事例に、科学技術社会論の視点から分析を行った。事例分析をとおしてわかるように、多言語化の作業は単なる異言語間翻訳ではなく、多言語化担当者は文化財情報の送り手と受け手の間に介在し、サイエンスコミュニケーションをより円滑にするために、企画・動員・調整・翻訳・編集・情報発信・フィードバックなど、一連の働きを担っている。失敗の少ない文化財多言語化を推進するためには、多言語化担当者という「必須通過点（obligatory passage point）」が必要である。

2021年7月に行われた奈文研の新人研修では、本中所長のレクチャーの最後に「『余計な』ひとこと」と題されたページがある。そこには、「今の風景との断絶やつながりを意識し、ときどき上を向いて歩こう。人・社会との関わりの中で研究成果を振り返ってみて、常に気に留めよう」と書かれている。この言葉から、本稿冒頭で書いた踏切に立っているあの標識――「とまり、きき、みて、とおれ」と、どこか似た思いを感じ取ることができる。メタファーとして理解するならば、ここの「とおれ」を「超越せよ」と捉えたい。文化財多言語化は、日本の文化財研究に複眼的な視点を与え、文化間・言語間のギャップを逆手に取り、新しい知見を創造する行為として、次なるフェーズへと向かわなければならない。

### 参考文献


淺野義弘・田中浩也・若杉亮介 2017「アクターネットワーク理論の Fab への援用」『Keio SFC Journal』17（1）：260-275。

Callon, Michael. “Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fisher-Men of St Brieuc Bay.” In *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, edited by John Law, 196–223. Routledge & Kegan Paul, 1986.

出口雅敏 2009「＜世界＞は、いかに記述されるのか：ブルーノ・ラトゥール著『虚構の「近代」―科学人類学は警告する―』川村久美子（訳）、新評論、2008年」『生活学論叢』15（0）：78-89。

平川秀幸 2002「実験室の人類学」金森修・中島秀人編『科学論の現在』、23-62頁、東京、勁草書房。

平川秀幸 2005「拡散モデルと翻訳モデル」藤垣裕子『科学技術社会論の技法』、292頁、東京、東京大学出版会。

宗像慎太郎 2005「科学の不確実性」藤垣裕子『科学技術社会論の技法』、292頁、東京、東京大学出版会。

奈良文化財研究所 2010『出土建築部材における調査方法についての研究報告』

平成18年度～21年度科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号：18202026）「遺跡出土の建築部材に関

する総合的研究」研究成果報告、215頁、奈良。
奈良文化財研究所 2021「平城宮跡資料館における木簡に関する多言語リーフレットの配布」http://hdl.handle.net/11177/9398（最終閲覧日：2021年11月22日）
奈良文化財研究所 2021「巡訪研究室（24）企画調整部 文化財情報研究室」https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2021/09/junpou24.html（最終閲覧日：2021年11月22日）
野原佳代子 2011「科学技術コミュニケーションの言語と機能―原発事故情報を翻訳理論で読む試み―」『専門日本語教育研究』13（0）：19-24。
大橋昭一・竹林浩志 2015「観光事業論におけるアクターネットワーク理論の意義：ポスト・アクターネットワーク理論をふまえて」『観光学』12：15-25。
唐 磊 2015「アクターネットワーク論研究 2：ANTにけるデータの活用法及びメディアコミュニケーション研究での応用」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』291：37-45、千葉、千葉大学大学院人文社会科学研究科。
渡辺政隆 2011「なぜサイエンスコミュニケーションなのか：『想定外』を想定するために」『専門日本語教育研究』13（0）：15-18。
Yanase Peter 2021「文化財の多言語化に失敗しないためには」『文化財多言語化研究報告』奈良文化財研究所研究報告第28冊、6-11頁、奈良。